

母と子の情景—子を取る・子取る—

182.0 x 227.0 cm
油彩 キャンバス / 1998

和歌山の地で
心豊かに育った少女は、
心象を表現する洋画家へと成長した。

洋画家 宇佐美 けい

宇

佐美けいがキャンバスに描くモチーフに、特定のモデルは存在しない。全ては彼女の心象からくるものだからだ。「母の春子から受け継いだ感性が制作に活かされています」と宇佐美は話す。

1937（昭和12）年生まれの宇

佐美は、父と母、4人の姉妹、父方の祖母とともに和歌山県那賀郡西貴志村（現在の紀の川市貴志川町）で幼少期を過ごした。両親から多くの愛情を受けて心豊かに育ったが、高校2年生の時に父を亡くす。それ以降、母は女手一つで子ども

たちを育てるために、大変な苦勞をした。両親が教師をしていたこともあり、母の願いは「子どもたち全員を教師にすること」だったと、宇佐美は近年になってから聞いたという。緑豊かな地で、のびのびと成長した宇佐美は、自然と教師の道を歩んでいくようになった。幼い頃、美術や体育の授業が苦手だったと振り返る宇佐美。「苦手なものに挑戦しよう」と、あえて和歌山大学の教育関連の学部へ進学し、課外活動は体操競技部に入部した。

彼女は、この大学で後に師と仰ぐ存在と出会うこととなる。高名な彫刻家で、画家としても活躍した保田龍門だ。彼は、フランスの彫刻家オーギュスト・ロダンの弟子、アントワーヌ・ブールデルから指導を受けた人物。宇佐美は大学在学中の4年間、保田にデッサ

ンと彫塑を指導してもらった。「芸術家としてのひたむきな情熱と、純粋なる感性を学びました」と彼女は言う。宇佐美が大学4年時に、保田は職を辞したが、彼女たちが卒業するまで度々、制作の進み具合を見に訪れたそうだ。「私の人生を貫くための指針を教えてください。さつた尊敬する先生です」と彼女はほほ笑む。

2006（平成18）年、宇佐美は描き溜めた作品をまとめ、「宇佐美けい作品集―あしたは晴れる―」を発行した。その冒頭で彼女はこう述べている。「五十年間、私は私の土俵で油絵を描き続けて来た。ただ一人でもいつも『良い絵とは何か』を考えて来た。そんな彼女の思いが詰まった作品の一部を紹介しよう。

『母と子の情景―子を取る・子取る―』で描かれているのは、優しげにほほ笑む母親と子どもたちの姿だ。画